

『聞き書き集』⑨

平成28年10月発行

しら とり み さ こ  
白鳥 みさ子 さん

大正9年（1920年）1月28日生 96歳

～亡き主人と共に歩んだ道のり～



喜茂別町教育委員会

## 「聞き書き」とは？

- ◇「聞き書き」とは、人から聞いた通りに書き取った記録のことです。
- ◇「聞き手」が「話し手」の方のお宅などにおじゃまして、お話をボイスレコーダーに録音します。
- ◇寄稿文と録音からできるだけお話しされた内容や口調を生かして、話し言葉で文章にまとめます。
- ◇それを本人に、確認や修正をしてもらいます。
- ◇「聞き手」の感想や批評は一切加えていません。



- ◎その人の経験や努力から、生きる知恵を学んだり、自分のこれからの人生に活かしたりすることができるかもしれません。
- ◎その人の人生を知ることにより、理解が深まり、支え合うことの大切さや、人と交流することの楽しさを伝えてくれるかもしれません。

－ 喜茂別で生まれて

私は、大正 9 年 1 月 28 日生まれ。もう 96 になったんだね。生まれも育ちも喜茂別なの。

両親は、御園地区で留寿都村との境目にあるキホン山って呼ばれてた山のとっぺんの出身で、私も御園で生まれたの。

※喜茂別町のはじまり

喜茂別町は、大正 6 年（1917 年）に真狩村（現留寿都村）から分離独立し、2 級町村制を施行し、村名を喜茂別村とした。

－ 4 人兄弟の次女でした

兄と 1 歳上の姉と 4 歳下の妹の 4 人兄弟でした。でも兄は北支（①）にいて昭和 16 年に太平洋戦争で亡くなったの。

※①北支：北支那方面軍は、日中戦争が勃発し 1937 年（昭和 12 年）8 月 31 日に支那駐屯軍が第 1 軍に改編されると同時に第 2 軍も設けられ、それらを統括するために編成された大日本帝国陸軍に於ける最初の方面軍である。11 月 20 日に大本営が設置され大本営隷下となり、1939 年（昭和 14 年）9 月 23 日には新設された支那派遣軍戦闘序列に編入された。司令部は北京に置かれ、主に華北方面を作戰地域とした。

だから、3人姉妹しかいなくて、そのうち長女は、同じ町内の佐藤さんに嫁いだから、私家が継いだの。

(長女 佐藤つか子氏 大正7年11月21日生まれ 平成26年10月15日 95歳 死去)

妹は、今札幌に住んでいるよ。4つ下だから今92歳だね。妹も元気で、今でも遊びに行ったりするの。

両親も長生きで父は92歳、母も88歳まで生きていたよ。

(父白鳥哲也氏 昭和50年8月12日 死去、母 白鳥みのり氏 昭和55年4月9日 死去)

昔の人では長生だったね。家族みんな長生きの家系だよ。



【4人兄弟で仲良く（右端が白鳥さん）】

## ー 市街地に引っ越してからの生活

私たち兄弟が小学校に入学する頃、両親が教育のことを考えて、人がいっぱいいる町内がいいんじゃないかって今のところに引っ越して来て、喜茂別の尋常高等小学校(②)に入学したの。

今住んでいるところに、元々あった熊谷さん（熊谷市松氏）の経営していた精米店を両親が引き継いだの。

引き継いだ後は、麦やいなぎびを製粉して商売をしていたね。

一生懸命働いてお金を得ていましたよ。精米店のほかに精米店で出た糠をつかって豚を飼っていたね。栄養の高い糠を食べさせていたからとってもいい豚になったみたいで、いい値段で売れたみたいだよ。

私たち姉妹は、両親からとても可愛がられたね。だから両親に対して反抗した記憶はほとんどないね。

でも、お父さんは厳しい人だったの。とても厳格で、まじめでとても口答えなんてできなかったよ。そのせいか、あまり遊びに出歩くこともなく、いつも家にいたよ。

でも、お母さんはとても優しくかったわ。

お父さんが厳しくて、お母さんが優しくかったからいいバランスだったのかしらね。

子どもの頃の思い出にあるのは、姉と妹とよくリヤカーを押して比羅岡のほうに山菜取りに行ったことね。

今みたいに道路も広くないところをみんなで歩いて行ったの。

少し山に入るとたくさん取れて、それをリヤカーに乗せてまた歩いて帰ってくるの。今考えたら結構遠いところまで行っていたのね。

※②喜茂別尋常高等小学校：現在の喜茂別小学校で、明治 38 年（1905 年）公立喜茂別簡易教育所指定、明治 40 年喜茂別尋常小学校と改称、その後大正 5 年（1916 年）に高等科併設し喜茂別尋常高等小学校と改称。尋常高等小学校は、小学校 6 年（6 歳から 11 歳）高等科（12 歳から 13 歳）の 8 年間となっている。

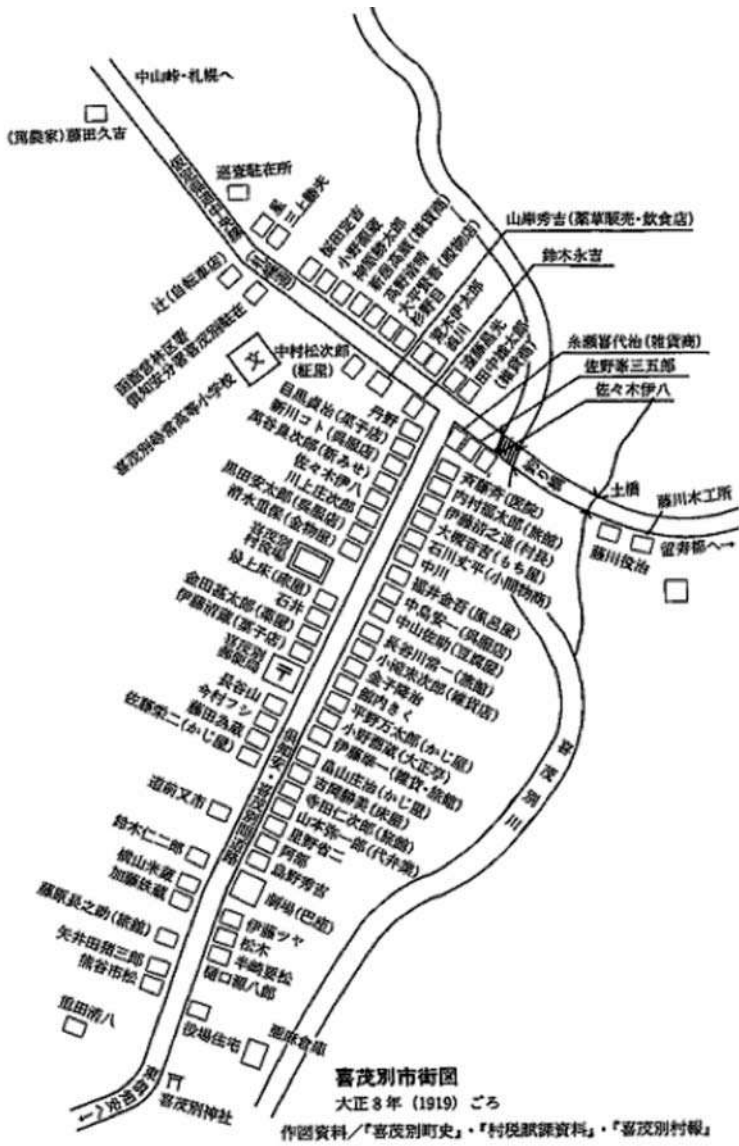
※当時の精米店の広告文

旧年中の御厚情深く御礼申候今般工場改築と同時に平麦製造機増設士候に付多少に拘らず御用命奉願上候 喜茂別市街精米製粉 ㊦白鳥精米所

喜茂別村報 第48号(昭和5年1月1日)より



喜茂別市街本通（昭和初期）



【喜茂別町市街図（大正8年ころ）】

## － 実家を離れての女学校時代

両親は教育熱心で、私たち三姉妹を全員女学校に行かせてくれたの。

私は七つ上がり（早生まれ）なので、小学校を卒業して12歳の時に庁立小樽高等女学校(③)の入学試験を受けて合格したの。

あのときは、喜茂別から私一人だけだったかな。

姉が先に札幌の北海道庁立札幌高等女学校（現北海道札幌北高等学校）に通っていたから私は小樽に行くことにしたの。

そのあと妹は、倶知安の町立実科高等女学校（現倶知安高等学校）に入学したの。妹は、姉妹のなかで一番成績が良かったんだけど、実家の近くにいたいって言って倶知安に行ったの。

あのころは、女学校に入る人も少なかったから、一生懸命勉強したの。周りの人も頭のいい人がいっぱいいると思ったからね。でも、実際行ってみたら同級生の中には、勉強あまりしていないひといたね。

授業は、今の子どもたちと同じくらいの時間だったかな。朝の9時くらいから昼の2時くらいまで。

教科も国語、数学、理科、社会、英語があったね。

私は、喜茂別から行って一人だったので、友達も少なくて他にすることもない時代だったから勉強ばかりしていたよ。だから、学年でも5番くらいにはいたわ。

おかげで今でも、女学校時代の同級生に会うと「白鳥さんは勉強できたね」言ってもらえるの。

でも、あんなに好きでいっぱい勉強したけど、今は何も覚えていないね。おかしいものだね。

勉強の中では、英語と数学が好きで、英語は先生が歩きながら教室の出入口に向かって行って「I go to the door.」なんて言



うのが楽しくてね。今でも、少し英語は話せるの。

数学は代数（数字の代わりに記号等を用いた計算式）なんて好きだったね。

女学校時代は、親戚の家に4年間居候したよ。

私が居候する前に、その親戚の息子さんが喜茂別の高等科（大正5年（1916年）喜茂別尋常小学校に高等科併置 12歳で入学）に入学していたときうちに居候させていたから、その縁で住まわせてもらったの。

授業が終わって学校から帰ったら、制服から着物に着替えて、居候先の店の手伝いをしたの。

居候先は、自転車屋で、いろんなことを手伝ったの。

あの頃は、車なんてほとんど走ってなくて、馬車か自転車に乗っていた時代でいっぱい走っていたから、仕事は忙しかったのよ。道路も今みたいにきれいじゃないからパンクとかの修理も多くてね。私も修理とかしたものの。



【女学校時代】

10代だったから、同級生は遊びたい盛りで出歩いていたみたいだけど、私は居候だったし、勉強したり店を手伝ったりしていたからほとんど遊びに行かなかったわ。

そうしたら、4年間はあっという間に過ぎて、卒業が近くなったとき、補修課の試験を受けて先生になってみないかって言われたんだけど、実家に帰るたかったし、先生はその時なりたいたいと思わなくて受けなかったの。

※③庁立小樽高等女学校:明治 39 年(1906 年)に北海道庁立小樽高等女学校として開校し、その後、昭和 22 年(1947 年)に北海道立小樽高等女学校、翌 23 年に北海道立小樽女子高等学校に校名を変更。昭和 25 年に新制高校の発足に伴い、校名を北海道小樽桜陽高校に変更し、同年共学となる。平成 18 年開校 100 年を迎えた。

－ 女学校を卒業してから

女学校を卒業して家に戻ってからは、裁縫やお花を習ったり花嫁修業したりしていたんだ。

だから、今も裁縫は得意で、編み物でベストとかいろいろなものを作ったりして、人に配ったりして楽しんでいるよ。なにより手を動かしているのが好きでやっているよ。

花嫁修業のほかに、アスパラの工場に勤めたりもしたの。

朝日アスパラ(④)ってあったでしょう。私、習ったわけではなかったけどそろばんが出来たから、アスパラの時期になったら、会社の人に呼ばれて経理の仕事をしに行っていたの。

仕事の中身は、伝票づくりだったね。いろんなところにアスパラを卸していたからたくさんの伝票を書いたの。

一生懸命間違えないように書いたね。ある日、その時の社長さんが私のところに来て、「白鳥さんの伝票間違いないか朝からずっと見ていたけど、全然間違いないね。すごいよ。」って褒められたの。とてもうれしかったわ。

それでね、一生懸命、まじめに働いていたら、社員の人たちから嫁に来ないかって結構言われたの。喜茂別では、まじめな娘さんで通っていたのね。



でも、姉は嫁ぎ先が決まっていたから、私は家を継ぐって決まっていたんだよね。

その時両親は、姉は結構やんちゃな性格で、少し手を焼いていたから、嫁いでくれてよかったって。

私は、性格がおっとりしているから、家を継いでくれてよかったって言われたわ。

※④朝日アスパラガス工場：昭和7年4月本社を東京におき、アスパラガスの栽培及び缶詰製造のため、喜茂別村に工場を建設し、朝日アスパラガス罐詰工場株式会社を設立創業した。代表者は斉藤松太郎氏。

#### － ご主人との出会い

主人（白鳥暁氏）と結婚したのは、昭和18年で23歳の時だったかな。主人も同じ歳で、母親同士が姉妹のいとこで、宮城県から婿養子に来てくれたの。

婿養子を迎えたから嫁に嫁いだ苦労が無く、両親と過ごすことが出来たのは幸せなことかもしれないね。主人は、いい人だったの、幸せな結婚生活でした。主人とは言い争いしたことな

いもの。意見が合うんだね。

自分でも不思議だけどもね。以前に取材（山のことで 後述）を受けた時も、主人には欠点が無いんだと言いました。

子どもは男の子3人、4人目に女の子が1人いて、男の子はみんな大学に入れることができたよ。女の子は岡山に嫁いだけどしょっちゅう会うことができるよ。

私は、幸い体も丈夫だったから4人も子どもに恵まれたね。

長男は札幌で画家をやっているよ。

自分で好きな道を選んだのが画家だったんだね。

次男は歯医者、三男は薬剤師をやっているね。

近くに次男の息子が歯医者をしているよ。ひ孫もいてね。

結婚したころは、精米店も何件かあったけど、うち1件になったね。

忙しい時は、とにかく仕事があって、倉庫の天井まで麦やいなきびが積んであって、ひいたものはとりにきてもらうんだけど、探すのに苦労したよ。

そのときは、のんこ（手鉤）で麦なんかが入った麻袋を引っ張るのがあったね。それで引っ張って馬そりに乗せて持って行ってたね。

昔は、車が無かったから、馬でみんな行き来していたね。



【結婚を記念して】

冬どっか行くのも馬そりだったし、とっても寒かったね。

雪が積もっても今みたいに除雪しないから道路も家より高いところになっちゃってその上を馬そりが通っていたんだわ。

店の製粉したのも馬でとりに来ていたから、家の前に馬がいっぱい止まっていたね。

馬がいっぱいいたから近所に馬の蹄鉄を打つ店があったね。

この通りも今よりずっとお店があったね。そのころは、まだ喜茂別も人がいっぱいいたから活気があったの。

今なら人が少なくなって寂しくなったね。

主人は、精米所のほかに、朝4時くらいに起きて御園地区にある自分の山を手入れしに行くの。下刈りしたり枝打ちしたりしてね、そのほかには、店で出た米ぬか撒いたりしていたみたい。

手入れしてきれいになった山を見渡して、満足していたみたい。

山の仕事が終わってから10時に帰ってきてやっとな朝ごはん食べているの。

一生懸命手入れした森は、伝承の森(⑤)って名前付いて、北海道から賞をもらったね。(昭和58年5月 北海道産業貢献賞 緑化功労賞)(平成7年3月 後志管内民有林造林コンクール優秀賞) 新町史 P540

それから精米所や、豚の世話をしたりして、朝早くから夜遅くまで一生懸命だったよ。若い時は疲れ知らずだったのかな。

それが主人の普段の生活だったんだね。

主人と結婚した時は、私は両親と一緒に暮らしていたし、店の経営は5年くらいお父さんがしていたから大変だったと思うよ。

そんななか、主人に一度だけ手を挙げられたことがあったの。

私の父が主人から話しかけてもらえないことを気にしているって主人に話したときだったね。

やっぱり、婿養子に来て私の両親と一緒に生活していたから、私の知らないところで気を使ったんでないかな。

でも、大火があって、一度家や店を失ってからは、主人が経営するようになったの。

それからは、主人も気を使うことが少なくなって、特に幸せな生活を送れたの。

それから主人は、一生懸命仕事して、休みもあまり出かけたりしないで、ずっと頑張ったの。



【夫婦の記念写真(昭和40年ころ)】

そしたら平成19年1月くらいに、急に食欲がないって言い出して、あまり食べなくなったの。

好物の具の入ったおにぎりが特に大好きでたくさん食べる人だったのにね。

だから、すぐに病院行って診てもらったの。そしたら膵臓がんでって言われてね。そのあと、1か月くらいした平成19年2月24日に亡くなってしまったの。あっという間で、とてもかわいそうだったし悲しかったわ。

でも、岡山から娘が看病に来てくれたの。娘とゆっくり時間いれてそれはよかった

のかなと思うよ。

仕事一生懸命にした人だし、あまり痛いとか苦しいとか言わない人だったから、調子悪かったのも、我慢していたのかもしれないね。

主人は亡くなって今は、御園の山は手入れする人がいなくなっちゃったけど、しっかり手入れしていたから、今でもちゃんと森になっているよ。主人が生きていたら、今でも山に行って手入れして満足していたんじゃないかね。

※⑤伝承の森：「林業技術伝承の森」は地域の目標となる森林、それを守り育ててきた人達の山づくりにかける情熱と培われてきた森林育成技術等を次代に継承していくため、北海道においては平成12年度に選定されました。

後志では、白鳥さん含め2名の方しか選定されていません。

▼コンクールに入賞したトドマツ林と白鳥さん



白鳥さん 造林コンクールで  
晴れの林庁長官賞を受賞

町内大町で米穀店を経営している白鳥さんのトドマツ林(〇七㌔)が、「第二十一回東北・北海道地区民有林造林コンクール」で林庁長官賞の榮譽に輝き九月十七日、仙台市で開かれた表彰式に出席して受賞されました。白鳥さんは知床別地区に三丁の山林を所有しており、商売のかわらで造林技術の向上に意欲を燃やしてきました。山林はトドマツ、カラマツ、シラカバの三種類が植栽されている純樺林で、後志支庁の産物でコンクールに出品されました。

コンクールの対象になったのはトドマツ林のうち、二十年前に植栽した〇七㌔の造林地。審査は環境に適した樹種の選定、植栽木の現存率(歩留まり)除、間伐、枝打ちなどの保育管理、病虫害の対応策、樹木の生育状況(樹高、直径など)の五つが中心で、白鳥さんのトドマツはそのいずれにも優れた成績を挙げました。

特に白鳥さんの場合、商売を造林に生かし、コマメカやパナマなどを植栽地に施することで、樹木の生育推進を大きく高めたという独創性が審査員の評価を得たものです。  
なお、白鳥さんは林

野庁長官賞のほかに、社団法人国土緑化推進委員会、東北・北海道地区緑化推進協議会からも表彰されました。

剣道創立三十周年記念大会  
三十一チームが熱戦交わす  
功労者の表彰も

町剣道連盟(三浦信夫会長)の創立二十周年記念剣道大会が九月二十六日、喜茂別中学校体育館へ三十一チームが参加して開催されました。

## 北海道産業界貢献賞(緑化功労者)

白鳥 咲さん受賞



昭和五十八年度北海道産業界貢献賞の表彰式が五月二十七日、札幌市の石狩会館で行われ、緑化功労者として大町の白鳥咲さんが表彰されました。白鳥さんの功績は次の通りです。

白鳥さんは、先代が四十年間にわたり観察、記録してきた有林データをもとに、自己所有山林二

十七㌔に独自の施業方針を立て、「森林との対話」をモットーに、機会あるごとに山へ出むき適期適作業に努めるほか、早くから肥培管理を実施するなど種々の山林経営を行っております。

とくに、山林の九〇㌔が人工林化され、適切な枝打ちや除間伐が実施されており、地域のモデル林として、林業グループの実習や研修の場として積極的に活用されています。また、日ごろから、林業指導機関との連携のもとに新しい技術や情報の収集に努め、自己所有山林での実践に心がけ、その成果の発表や地域への普及に大きく貢献しております。

【白鳥咲氏の功績 町広報より 昭和 57 年 11 月号 (上段)  
昭和 58 年 7 月号 (下段)】



## － 恐ろしい大火の経験

大火の時は、火事の知らせがあったときは、長沢の山に逃げたの。

喜茂別中が全部燃えたと思ったわ。

桎屋根（エゾマツやトドマツなどの薄板を釘で打ち付けて何枚も重ねて屋根にしたもの）だったから、火事の火の粉が飛んできて桎屋根に落ちてそこからまた火事になっていたから、順に火事になったわけじゃないの。

火事的时候はとても風が強くてね。あっという間に燃え広がったのよ。

火事になって、家や着るもの、結婚したときの写真もすべて失ってしまったの。悲しかったね。

だから火事は本当に怖いね。

結局火事になったのは、消防番屋からうちの通りだけで、なんで自分のうちの周りばかり燃えてしまったのかと思ったよ。

でもひとつだけ助かったものがあったの。

家にトランクが一つあったの。

その中には、現金や預金通帳なんかの大事なものをに入れていて、とても大事なものだったの。

私は、トランクを家の裏に布団をたくさん重ねてその下にしまって逃げようとしたの。これで、火事が来ても大丈夫だと思っていたんだけどね。そしたら、父に「そんなことしても火事が来たら燃えてしまうから持って逃げなさい。」って言われたの。

そのとき、おなかに三男がいて臨月も近かったから動くのも大変だったんだけど、言われるままに持って逃げたんだよね。

火事がおさまってようやく家に戻ったら、私が大丈夫だと思っていた布団を積んだところは焼けてしまって何も残っていなかつ

たの。

だから、あのとき、布団の下にしまっていたら本当にすべて失っていたわね。

火事で、当時お客さんから預かっていた麦やいなきび、そばも全部燃えてしまったから、搗き代ももらえなかったの。

大火があってから1か月あとの6月12日に三男が生まれたの。

生まれたとき大槻さんっていう産婆さんがおむつを持ってきてくれたの。火事でみんな焼けちゃったからとてもありがたかったわ。他にも御園の熊谷さんは食べるものないだろうって、いなきびとかもってきてくれたの。

何にもない時だったからとてもありがたかったわ。でもね、家が燃えてしまった人たちはとても努力したと思うわ。

焼けあがると精神も強くなって頑張れたのかな。

だから、とても努力したの。

そのあと、服なんかは配給があったけどサイズが合わなかったりしてね。

## 「歴史が物語る、未来の町の姿」

シリーズ⑧

## 喜茂別市街の大火

昭和二十三年五月十二日、本町にとって忘れてはならぬ大惨事がありました。市街地の半分が焼け野原となった喜茂別市街地の大火、一名が焼死するなど、り災者は、九百七十名にものぼりました。敗戦間もない当時の村は、この大火により、ぼう然自失の事態に陥ったが、復旧本部の機敏な対策の樹立やふるい立ったり災者の復興意欲でその数カ月後には見違えるほどの市街地を形成するに至りました。現在も本町の記念日として語り継がれているこの大火を振り返ってみましょう。

## 大火発生

昭和二十三年五月十一日午前二時二十分ごろ、理髪業瀬戸田幸次郎宅のノコギリストーブの不始末から発した火は、約二時間のうちに市街の二分の一、百五十棟三百七十戸を灰じんにした。あつという間の出来事であった。夜が明けて焼跡に立った時、あの火事場独特のにおいのたゞよう焼け野が原に、残っているのは工場の煙突だけで、柱一本、電柱一

本なかった。

敗戦のいたでなお消えず、衣食住に苦しんでいる時期に村は開村以来の大きな苦難を迎えた。

## 被害の概要

り災の主な建物は、北海道農業會喜茂別第一、第二工場、同住宅、喜茂別村農業協同組合醸造工場及び倉庫、同農機具工場、日通営業所、同倉庫、調査部長派出所、配電会社、劇場、北海道自動車運輸株式会社事務所及び車庫、内村旅館、北農工場寮、鉄道寮、羊蹄荘。

り災者の大部分は工場及び諸公営団地地帯なるため、工場従業員、農業協同組合職員、村役場職員、日通従業員など。

焼失面積 二万六千三百五十坪  
突突全壊数 一万八百五十坪  
り災戸数 三百七十七戸  
り災人員 九百七十人(男四百七十八人、女五百五十三人)

損害見積額 三億円

## 大火をふりかえって

## 消防団の活動

その当時はモーターサイレンがま

だ設備されていなかったので、火元のすじ向かいに住んでいた大場消防手が、半鐘を打つため、やぐらに登り、いくつも打たないうちに不運にも木づちの柄が折れ、警鐘はそれっきり鳴らなかつた。

すでに火の手はあがり、おりから南東十二メートルの風に火勢はみるみるうちに燃えひろがっていく形勢になった。いちはやく、かけつけた消防団員は、団長の指示により、ポンプを本部前にすえ、本部貯水槽から放水して延焼をくいとめることにつとめた。火元が消防本部に近く、風向、風速などの諸状況を判断してとった処置であった。

しかし、一年中の最乾季であり、トタン屋根やモルタル壁の少なかつた当時の家屋であるから、火のひろがりは予想外に早く、あつという間に北農工場に移った。とくに工場の油の引火による火柱と爆音はものすごく、町民を激しい不安と恐怖に追いこんだのである。

また風速も始めの十二メートルからしだいに強くなるとともに、飛び



火がはげしく、まったく思いもよらない遠くの方に火の手があがるというありさまであった。

部落の消防分団員も、消火につけ延焼防止と避難者の誘導救出にあたった。火のひろがりが大きいため、分団毎の行動がせいっぱいであった。

俱知安、京極、狩太の消防団から各一台、真狩消防団からは二台、計五台のポンプ自動車が必要にきてくれたが、風下の踏み切りの所から中へ入ることができなかった。また留寿都消防団のポンプ自動車は風上の旧役場付近にあって防火につとめてくれた。

消防団員は実によく働いた。団員中にもり災者は多数あったが、わが家はどうなっているのか、かえりみる暇もなく消火にあたったのである。翌朝七時、いちおう鎮火したので、団員に対して、家族の安否を確かめるために、わずか二時間の休けいを与えただけで、再び焼跡整理と警防の任にあてるなど、二昼夜の間はまさに不眠不休の活動を続けた。(当時喜茂別消防団第一分団長として活躍した故中村政義さんの談話より)

#### り災の思い出

あの日、私たち一家は半鐘の音で目がさめました。「火事だな……」と夫は手早く身したくをととのえ始

めました。いつもと様子がちがう外部のざわめきは、あるいは近火ではなからうかと、雨戸をあけてみて驚いたことは、もうその時、裏手一帯は真赤でした。てっきり裏山が焼けているのだと思ったほどでした。

表通りを走る人声、近所のざわめき、これは、ただごとではないと感じた時、夫は、もう「さし子」に着かえ、二、三の伝言を残してそそくさと出動してしまいました。

火元は、どうやら南の方らしい。乾燥しているうえに、しきりに火の粉が散るので、とにかく、運べる物は出そうと、父母とともに裏手の広い空地に家財を手当たりしだい無我夢中で運びました。

けれども、いくらも出さないうちに、こんなことをしては命が危ないと思うようになりました。それは、火の粉が雨のように落ち、落ちたところが、めらめらと燃えあがるからです。雷解け以来、乾きに乾いた屋根のマサはささくれだつて、たきつけ同様でした。「逃げなければ……」という父の指図で私はいっさいをあきらめて、母に上の子の手を引いてもらい、私は下の子を背負つて、駅へ向かって逃げました。その時、踏み切りの所の家が燃えており、飛び火だ、わが家は……と不安をおぼえましたが、背後に感じる熱気にお

が家はどうなっているのか、ふり向く余裕もありませんでした。長沢さんの山まで逃げました。

山から見た町、目のとどく限りそれは、**「杜絶」**の一言に尽きる一面の火の海でした。

「ああ、喜茂別は全滅する」と思いました。まったく、あつという間のできごとでした。(大町・白鳥みさ子さんの談話より)

#### 隣接町村への意識

あの火災を通じて、村外のかたがたにはずいぶんお世話になったことも忘れてなりません。わけても隣接町村の援助はまことに尊いものでした。千人に近い人々が焼け出されたのですから、私は火災の最中に、京極、留寿都、真狩の各婦人会に対し、**「たき出し」**の依頼をしました。

ところが、夜明け方には、もう三食分の「握り飯」をとどけてくれました。あの時の感しさをいまもっておぼえています。その他、消防の応援出動はもとより、寄せられた行為の数々は、喜茂別町民として永久に忘れてはならないと思います。(菊地村長の談話より)

## － 大火からの復興

火事があって一面焼け野原になっちゃったの。  
でも店はすぐに始めようって決めて、まずその年の夏くらいには豚舎を建てたの。そして豚を1頭飼ったの。豚はすぐお金になるって言われたからね。

そして、住む家なんてなかったから、私たちも豚舎に寝泊まりしていたの。

私と主人、3人の子ども、そして両親が豚と一緒に暮らしていたの。

次に建てたのは、工場だね。そしてやっと最後に家を建てたの。工場は建てたけど、製粉する機械なんかも燃えちゃったから、中で使う昇降機（製粉するための機械）もなかったの。

でも、主人が一から全部手作りでつくったの。こんなことができるんだ、改めて主人をすごいと思ったわ。

それから豚の数を増やしたの。何頭もいたよ。

生き物を扱うのは大変だったね。

夜中に生まれたりするから、子豚がつぶされないように親豚と分けておいて、何時間かおきに乳を飲ませに行ったりしたね。

休みもなくて、寝不足だったし、生まれたばかりの三男もいたから大変だったけど、自分のことだから苦ではないよ。

当時は、従業員も1人は雇っていたね。

昔だから食べるものにも困っていた人を使っていたんだわ。家に住まわせてね。そんなひとを雇って自立したらまた新しい人を雇ったりしたね。

あと、豚は、市街地でも飼っていたひとがいたからいろいろなところで飼われていたね。

夏になると、匂いとかあちこちでしていたんだろうね。今じ

や考えられないけど、みんな飼っていたから理解があったのかね。そういう意味ではいい時代だったよ。

やっぱり財産は、残していかなきゃいけないね。

火事の時持って逃げたトランクの中の蓄えがあったからたから店を再開できたよ。本当に助かったね。

## ー やっぱり健康第一

今 96 歳になって、同級生やお友達も亡くなったり、体悪くしたりしているから会う機会は少なくなったね。

普段は一人でいるから心細いね。しかたないけどね。行くところないものね。だからって言って家を空けるのもなんだかできなくてね。でも、家に遊びに来てくれる人がいてくれたり、兄弟や、孫たちと会えるのがとても楽しいね。家族が集まるのは幸せなことだね。

これから何か新しいことしようとかは考えていないよ。今は、健康を維持するのが一番だね。これまで十分に働いたからね。

でも、休めるときは、町の行事とかいっぱい参加しているよ。

今でも社協（喜茂別町社会福祉協議会）の旅行にも毎回行っているんだよ。

買い物も好きだし、おしゃべりも好きだから、いろんなところに行ったね。

沖縄にも行ったし、外国はフィリピンなんか行ったね。

主人は外出があまり好きではなく、私は、いろんなところ行かせてもらったね。

いつもは、朝はゆっくり 7 時くらいに起きるね。夜は 9 時くらいに寝ますよ。食べるものは、好き嫌いは少ないけど、生ものは食べたことが無いの。煮たり焼いたり。料理は好きだから、

みんな自分で作るの。手打ちそばも上手だよ。

売っているそばもあるけど、やっぱり自分でつくったそばのほうがおいしく感じるよ。

そばの作り方もいろいろあるけど、最近茹でてでも切れにくいそばが打てたの。新しい発見だったわ。

つくったそばは人に食べてもらったりするのが楽しいの。

料理のほかは、天気良ければ畑仕事に行っているよ。

背の高い野菜は、難しくなったから馬鈴薯を多く植えているし、アスパラも植えているよ。いっぱい育ててみんなにあげるのが楽しみ。

最近木になるイチゴにも挑戦しているの。今は花が咲いて、実がいっぱいになってくれたらいいね。

脚は少し痛いけど内臓が丈夫なのか、動いても疲れにくいね。

あと、夜は毎日お風呂に入ることがとても幸せに感じるね。

いろんなこと自分でするから、普通の96歳とは違うと思うよ。自分でできることは何でもやるの。

－ これから

喜茂別町には昔はたくさんのお店があってとても活気があったね。

だいぶ人が少なくなってしまったね。やっぱり人がいてこそ活気が出ると思うの。子どもがいっぱい生まれてほしいね。

子は宝だよ。

私は、この町のことが好きだから、買い物も町内でするようにしているの。少しでも、町のためにと思っているわ。

これからは、健康に気を付けて100歳までは元気でいたいね。

何につけても健康が一番大事だよ。



【ご夫婦で撮影した最後の写真】





人と自然がきらめく町

きもつ